

TENTI TODAY 「新聞の記事より」「耳の痛いお話」「恐縮」			1
会員の広場 受信メール(2通)			2
随筆	「日々をいとおしみて」より「いわしとさつま芋」	宮川典子	3
歴史	維新の元勳「大久保利通」についてーその3ー	臺 一郎	4
歴史	「了解日本(日本を知る)」「(14)」「長崎のみどころ」(2)	兪彭年	7
回顧	有楽町慕情(11)「石坂泰三社長の時代」	津田孚人	9
講演会	「新三木会」「奈良興福寺佛教文化講座」		12
事務局			12

TENTI TODAY

阪神タイガースのリーグ優勝が決まり、大阪が大いに盛り上がっています。今夏の高校野球でも慶応高校の優勝で異常なほどの盛り上がりを見せました。日本人には理解できますが外国人には理解不能でしょう。たかが野球、されど野球、外国生まれの競技にかくも熱中する日本人が多くいるのに驚かされます。

岸田再改造内閣がスタートしましたが、党内事情優先で国民は蚊帳の外、その必要性、意味など全く伝わりません。ジャニーズ問題で、日本のマスコミが反省しきりですが、知りながら何故報道しなかったのかへの説明がなく、不満が募ります。

モヤモヤした国民の不満、に伝えてくれる新聞記事がありました。少し長くなりますが紹介させていただきます。

朝日新聞9月14日朝刊、オピニオン&フォーラムの欄での「それ謝罪ですか」というテーマに英国生まれのジャーナリスト、デイビッド・マクニールさん(聖心女子大教授)は、語る。

「日本に移住して20年以上経ちますが、この国では「謝罪」に特別な意味があるように思えます。神妙な態度で謝れば、あるいは職を辞せば、責任を取ったことになる。政治家や、企業トップが、あいまいな釈明の言葉で済ませてしまえる背景には、文化論でなく日本のメディアの抱える問題がある。

首相官邸の会見にも出席しましたが、まず、質疑のキャッチボールがほとんどない。記者の質問の多くは形式的で、鋭い質問も少ない。厳しい質問を重ねた記者は、私の目には国民の負託に答えていると映るが、現場では記者クラブのルールや「和」を損ねた人物と扱われる。

対政治家だけでなくジャニーズ関連でも会見で厳しい質問をしたのはフリーの記者や外国メディアだけ。

会見の追求の甘さは、日本の記者独特の仲間意識と内向きぶりだけでなく、こうしたメディアが抱える構造的な問題にも起因している。旧統一教会自民党の問題も同じく、不作為の責任を問われているのはメディアも同様。なぜ「見て見ぬふり」が続

いたのか、事実と問題点を検証し、再発防止策を練る。そのプロセスが必要です」

現状では、この流れは続きそうです。不満が一気に爆発して過激なグループの誕生、ということにならないと良いのですが・・・

耳の痛いお話

「日本は NATO と呼ばれています。もちろん、NATO(北大西洋条約機構)ではありませんよ。Not Action Talk Only です。話すだけで何も動いてくれない」 ジャパン・アズ・ナンバーワンと呼ばれたのは遥か昔のこと。社内調整が多く、数%の値下げに数カ月かかる日本企業は、諸外国にとって極端に面倒くさい「客にするメリットのない存在」になっている。その結果、半導体、LNG(液化天然ガス)、牛肉、人材……など、さまざまなものを「売ってもらえない国」になってしまった。(8/20・東洋経済オンライン)

恐縮

先日、日比谷のミッドタウン内のカフェに入りました。フリードリンクでしたが、水ばかり飲んでしていると、離れたテーブルの若い女性がわざわざ席を立てきて、コーヒーをお持ちしましょうかと声をかけてくれました。老夫婦二人、大恐縮でした。

また、バスケットの試合を応援に立教大学に行ったとき、JR武蔵野線の新座駅前で小さなカフェに寄りバス停を訊ねました。若い女性店員、親切にもご案内しますと途中までついてきてくれました。恐縮しました。

会員の広場

受信メール

①

宮川典子様

エッセイ集「あの時の夏」に関心を持って読みました。アッツ島で日本軍を壊滅させた米軍部隊の次の攻撃目標が千島列島であると想定して、日本軍は、満州から精鋭部隊を列島最北部：占守島に近接する幌筈島に移駐、太平洋戦争最後の戦いに備える、このことが浅田次郎著「終わらざる夏」(上・中・下巻)に詳しく記載されているとのこと、早速、近くの図書館でお借りして一気に読みました。

我々があまり理解していない千島列島最北端占守島での敗戦直前、敗戦直後の日本軍の動きが詳細に書かれていて、新たに学んだことが多々ありました。そして「終わらざる夏」がカバーする範囲(例：ベルリンで対独戦に勝利したソ連兵が休む暇なくカムチャッカ半島に連れてこられる)が、広く、とても勉強になりました。

宮川様のご指摘の通り、戦争は割の合わないプロジェクトです。それでも、ソ連は、ポツダム宣言を無視したのか、日本固有の領土：千島列島、北方四島を奪い取る、したたかです。日本の政治不在(首相・閣僚が2年程度で替わる)は、世界に例のない特異なものですが、ここも変革する必要があると思います。(戦中も同じでした)(佐川雄一)

②

残暑お見舞い申し上げます。天地 8月号確かに拝受しました。

コラム(寸評?)に頷くことしきりです。いつも身近なことから世界の事まで幅広くサーチされていることに頭が下がります。私もこれが最後と思いつつ、やっておきたいこと、行ってみたいことを実行したいと思います。

こちら函館は、8月10日に観測史上最高の35.4℃を記録しました。日本列島全体が亜熱帯・熱帯のような気候になってしまったような気がします。人間活動による温暖化であることは疑う余地もありません。今まさに地球が喘いでいます。次世代に負の遺産を背負わせてはいけません。私たちは便利で快適な生活に慣れすぎてしまったようです。CO2削減・ゼロに国が覚悟を持ってイニシャチブを取るべきです(こういう発言こそ他人事にしてている自分がいます)。いまは旅行の際、飛行機は使わず列車にしています。(志賀直信)

連載

エッセイ集 宮川典子(94歳) 「日々をいとおしみて」(2022年11月)より

「いわしとさつま芋」

昭和初期、東京下町の子供のおやつといえば、焼き芋が一番の人気であった。近所に大きな土釜を二つ持つ店があって、三時近くなると行列ができる。私の家でもよく買って来て、きょうだい六人が仲良く輪になるひとときがあった。その後日本は、太平洋戦争へと突入、昭和二十年終戦となった。極端な食糧難の折、十八歳を頭に育ち盛りの子供を抱えて、父母はどんなに苦労したことだろう。

その終戦直後の夜の八時過ぎ、もう夕食は終わっているのに、いわしの配給があった。一人一匹ずつで冷蔵庫もない時だから醤油と砂糖で煮つけ、翌日のおかずとする。砂糖は米の配給の代替品として各家庭にあった。

当時いわしといえば貴重な蛋白源だ。みな楽しみに食卓に着く。しかし口に入れたがどうしてもものを通らない。石油臭いのだ。戦争末期、東京湾には沢山の船が沈められ、そこから流れたガソリンを魚が飲み込んだと後から聞いた。臭いに敏感な私はこっそり弟に食べさせ、それ以来いわしは拒食症となった。

食料の配給制は尚も続いていたが、それだけではとても足りず、時々近郊の農家へ闇の買い出しに行く。翌年の春先、弟が買ってきたさつま芋が何の味もしない。「いつもの家が留守で近くの人が『これでいいなら』と売ってくれたのさ。畑に植えるための新しく出て来た芽をかき取った、残りいもなんだ」との話。

それ以来私はさつま芋を見るのも嫌になった。そんな物の代価として母の貴重な和服一枚が消えたのにも腹が立った。

こんないきさつで、結婚後も進んでいわしやさつま芋を献立に加えることはなかった。二歳年上の夫も同じような経験をしているので、文句も出なかった。頑固な私、いわしの代わりにあじを、さつま芋を食べなくてもじゃがいもでと思い続けてきた。

それが一変したのは、七〇年以上も経った昨年のことである。友人宅でケーキと焼き芋を出され、芋は持ち帰り、離乳期のひ孫のところへ届けた。全身で喜びを表し、おいしそうに食べるひ孫の姿にふと私の心が動いた。

折しも生協からのパンフレットに、さつま芋をおいしく育てる方法と調理法が丁寧に書かれていて早速芋を注文した。砂糖は使わず、さっとゆでこぼしてあくを抜き、水と

みりん、塩少々、レモンの輪切りとでじっくり煮込む、その上品な味が何ともいえない。

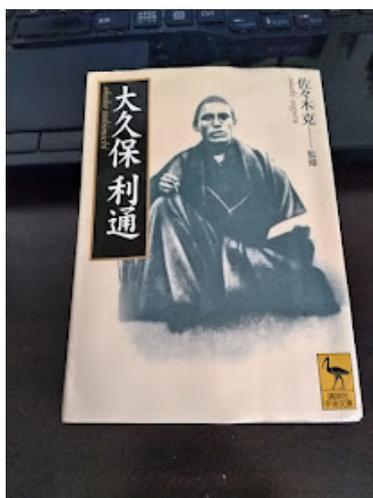
いわしについても、子供たちと会食した時、長男の妻が自分で調理した物を持って来た。おっかなびっくりで少しずつ食べたが、その豊潤な味と香り、長い間いわしを敬遠していた自分の気持ちは一体何だったのだろう。

食欲旺盛な私は、今でも料理を楽しみながら作っているが、いわしとさつま芋、五年前、八十九歳で亡くなった夫に食べて貰えばよかったと、今しみじみと思う。

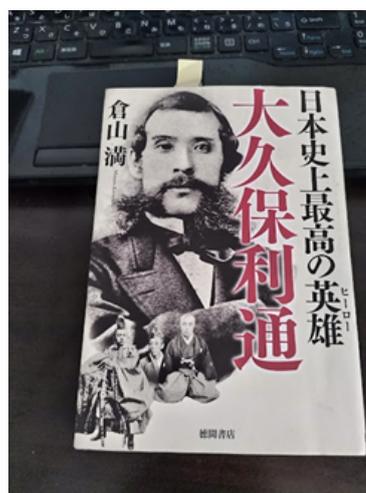
維新の元勳「大久保利通」について—その3—

臺 一郎(75歳)

佐々木克「大久保利通」



倉山満「大久保利通」



(以下前回から続く)

1867年(慶応3年)、大久保利通は朝廷より参与に任ぜられ、維新政府の実現を目指す有力な政治的リーダーとして存在感を強めた。この年の10月、西郷隆盛、大久保利通、岩倉具視等による倒幕の決定(王政復古)に危機感を持った徳川15代将軍慶喜は、天皇に対してただちに政権返上の「大政奉還」を奏上、翌日これが勅許され大政奉還が成立した。そして翌1868年10月、明治天皇が一世一元の詔を発布。以後年号は明治となった。

1869年(明治二年)天皇は遷都に反対する京都市民への配慮から、京都御所を行幸という名目に出て江戸に下り、江戸城に入城した。そしてほどなく江戸城は皇居と呼ばれるようになった。またこの年、「版籍奉還」が実行され、大久保利通は維新政府において太政官の参議に任じられ、薩摩藩士から維新政府の有力政治家へと身分が変わった。

1871年(明治4年)、維新政府は「廃藩置県令」を布告。国内の300弱の藩は中央維新政府管下の府と県に一元化された。この年、大久保は大蔵卿(後の大蔵大臣)に任ぜられ、同年11月には欧米主要国との不平等条約改正の交渉や産業施設、社会制度等を視察・調査する足かけ2年間に及ぶ岩倉使節団に副使として参加した。我が国の統治体制が、名実ともに徳川幕藩体制から天皇を君主とする維新体制へと切り替わった年と言えよう。

1873年9月(明治6年)、大久保らは欧米から帰国。板垣退助や西郷隆盛らを中心に国内で燃え上がっていた征韓論の動きを沈静化・阻止するとともに、殖産興業など内治優先の行政を推進するために太政官内に内務省を設置し、自ら内務卿に就任した。その頃の内務卿の役割は後の内閣総理大臣とほぼ同じである。

征韓論に破れた西郷は参議や近衛都督など全ての公職を辞して下野し、故郷薩摩へと帰った。西郷の下野は薩摩出身の軍人や官僚など約600人の辞職と薩摩帰国を誘発し、ために近衛軍は一時的にその機能を失った。

その後大久保は1874年(明治7年)、江藤新平らによる佐賀の乱、台湾での琉球漁民の殺戮騒動等を鎮圧・解決したが、1877年(明治10年)1月に鹿児島に於いて西郷隆盛を盟主とする旧薩摩藩士による反乱「西南戦争」が勃発したため、維新政府の責任者としてその鎮圧と平定にあたった。西郷の幼なじみであり維新の盟友でもあった大久保は、乱の鎮圧のために政府軍を派遣し、9ヶ月近い攻防の末、9月下旬ようやく反乱軍に勝利して西郷は自決し、平和を回復した。

国民的人気が高かった西郷隆盛を自決に追い込んだ中心人物として、大久保の一般国民の評判は下落、一部の旧士族からは怨まれて命まで狙われるようになった。そして1878年(明治11年)5月、大久保を西南戦争において西郷を自決にまで追い込んだ中心人物として、旧士族の暴漢により赤坂紀尾井町において大久保は惨殺された。そのとき大久保は47歳。まだまだ働き盛りであった。

事件当日の朝、大久保は福島県令・山吉盛典に対し『ようやく戦乱も収まって平和になった。よって維新の精神を貫徹することにするが、それには30年の時期が要る。それを仮に三分割すると、明治元年から10年までの第一期は戦乱が多く創業の時期であった。明治11年から20年までの第二期は内治を整え、民産を興す即ち建設の時期で、私はこの時まで内務の職に尽くしたい。明治21年から30年までの第三期は後進の賢者に譲り、発展を待つ時期だ』と将来の構想を語ったという。以上は大久保が殺された日の朝の話である。大久保は自分の運命について何かを感じていたのかも知れない。

大久保利通の最後については、日本における近代郵便制度の父とも言われる前島密の不思議な体験も紹介したい。前島は1835年(天保6年)に越後の豪農の上野家に生まれ、江戸に遊学して洋学を修めた後に幕臣前島家の養子となった。維新後は新政府に出仕し、大久保が内務卿となってからは片腕として仕え信頼が厚かった。前島の体験とは以下のようなことであった。

「明治11年、大久保が暗殺された3～4日前の晩、私は相談のために大久保公の屋敷に行った。一緒に晩餐を食べていたら『前島さん、私は夕べ変な夢を見た。西郷と言い争って格闘までしたが、私は西郷に追われて高い崖から落ちた。脳をひどく石に打ち付けて、脳が砕けてしまった。自分の脳が砕けてピクピク動いているのがアリアリと見えたが、不思議な夢ではありませんか』というような話だった。

大久保公は平生夢のことなど一切話されぬ人だったから不思議に思った。そして数日後、私は政府の太政官で緊急の会議があったので早くから出かけた。皆が揃ったのに大将(大久保公)だけが見えない。どうしたのかと話していたら、今、紀尾井町

で大久保公が刺客の手に倒れたとの報があった。大急ぎで現場に駆けつけてみると、大久保公はまだ路上に倒れたままで、身体は血だらけ。脳が碎けて、まだピクピクと動いていた。

三、四日前に親しく聞いた大久保公の悪夢のことを思い出し、私はぞっとした」と。今で言うデジャブである。もしかすると大久保利通はある種の靈感の強い人だったのかも知れない

さて本稿の最後に大久保利通の人間像やそれを示すエピソード等について、代表的なことを箇条書きで簡単にまとめると共に、大久保同様に明治の元勳で維新政府の参議も務め、後に早稲田大学を創設した大隈重信が明治の末に新聞のインタビューに答えた大久保利通論の一部を簡単に紹介したい。まずは友人や側近や部下が語った大久保利通の人となりを下のようにまとめてみた。いずれも佐々木克監修の『大久保利通』から引いた。

大久保公は公務上のことは極めて忠実で、人にも計り、人の言を容れ、一事を裁断するにも念には念を入れる流儀であった。ただ一旦採決した以上は、もう何事が起きても、気が迷うだの躊躇するだのということは全くなかった。

大久保公は金銭に関して非常に清廉潔白であり、自分の金を貯めようとか、子孫のために財産を残そうという気はまったくなかった。それどころか必要だが予算のつかない公共事業は私財を投じてまで行い、国の借金を個人で埋めていた程であった。

大久保公は出身藩に関わらず能力が高い者を積極的に登用した。しかし、それまでいかに親交を結んでいた者であっても、仕事上で賄賂を受け取るなど不正が明らかになった場合は、全く容赦なく切り捨て、公正無私に取り扱った。

大久保公は部下に対して大変親切で世話もしたが、決して礼儀をおろそかにせず、部下を呼ぶ場合も呼び捨てにせず、〇〇君とさえ呼ばず、〇〇さんと呼んだ。にもかかわらず大変に威厳のある人で、公の前に行くとその威厳にピンと打たれるような感じがした。

岩倉視察団に参加した日本の政治家の中で、外国人と話して対等の威厳態度のあるのは大久保公一人だった。大久保さんだけは、西洋人もその人物、風采、態度には敬服尊敬している風が見えた。彼はいつも威儀厳然としていて、西洋人も決して馬鹿にしないというのが、通訳をした留学生一同の一致した意見であった。

大久保公は大変に無口な人だった。話すにしても大抵は人の説を良く聞いて、最後に「それでよろしい」とか「それだけですか」と言うくらいだった。但し、寡黙だが他を圧倒する威厳を持ち、冷静な理論家でもあったので、面と向かって彼に意見できる人はごく僅かだった。

次に大隈重信の大久保利通論の一部を紹介する。

「大久保公は維新時代唯一の大政治家だ。西郷は政治家じゃないが、大久保は純然たる政治家だった。沈着で冷静で深謀のある大政治家だったから、大久保同

様に欧米視察から帰国した木戸と二人で征韓論のことを到底行えぬとみたのだろう。

西郷と大久保の友情は深かったが、それと征韓論のことを一つにしないところに大久保の大久保たる特色があった。木戸と大久保のどちらが偉かったと言えば、それはどちらとも言えない。木戸は神経質でちょっと小さいことを心配していたようだが、大久保の特質は意志の堅固と冷静と決断力に富んでいたことだ。ともかく木戸と大久保は維新時代の二大英傑だった」

大久保利通は知名度や国民的人気が今でも低い。その理由は第一に彼の印象がやや陰気で気むずかしく頑固そうな感じがすること、第二に西南戦争を鎮圧平定して、首謀者の西郷隆盛を城山で自決に追い込んだ中心人物と見なされたこと、そして第三に大久保は明治 11 年に暗殺されてしまったがために、その後の日本国の発展に足跡を残せなかったといったことかと思う。

それにしても大久保利通には、もう少し、せめて本人も望んでいたように、あと 10 年は政治家として活躍して欲しかったと思うのは筆者だけではあるまい。

「了解日本」(「日本を知る」(第14回)

愈彭年 (86歳)

長崎の見どころ(2)

長崎唐船貿易(中日長崎貿易)。

明の時代には、公的に管理された勘合貿易(朝貢貿易)のみが許され、民間貿易は禁止されていた。しかし、日本への貿易を行う民間船はまだあり、これは海禁に違反する密貿易であった。

勘合貿易の記録は、1404年(明暦2年)から1419年(明暦17年)まで、日本船の来航は6回、明船の日航は7回、1432年(明暦7年)から1547年(明暦26年)まで、日本船の来航は11回、明船の日航は1回、となっている。

明の朝廷は、朝貢の見返りとして割増の土産を与える「厚往薄来政策」を推進したので、日本(当時は室町幕府)は朝貢の名目でより大きな経済的利益を得ていた。このように、勘合貿易は本当の意味での貿易ではなかったのである。

1633年から1639年にかけて、徳川幕府は鎖国令を公布し、国内での天主教の普及と信仰を禁じた。中国とオランダだけが長崎港で通商する許可を取得、外国人の長崎滞在を制限し、日本人の海外渡航を禁じ、すでに海外に出ている日本人の帰国を許可しなかった。

1644年、清朝が建国し、清廷は、明代の海禁と朝貢貿易を継続した。康熙帝は「海禁を厳しくしても、密貿易はなくなる」と言ったという。清代の海禁は明代より厳しく、20年間続いた「遷界令」は広東、福建、浙江、江南、山東沿海の5省の沿海住民を海岸から15~25キロ離れた地域に強制的に移転させ、沿海の家屋と船を全焼させた。

1683年、清国軍は台湾を奪還し、1684年には海禁令が解かれ、広東、福建、浙江、江南の4省で史上初めて税関を設置した。

1685年、康熙帝は2人の官吏と13隻の船に鹿皮と砂糖を積んで日本に派遣し、

政府間貿易を開始しようとした。すでに鎖国を宣言していた徳川幕府は、清国の要請を拒否した。そのため、当時長崎に貿易に行った中国商船はすべて民間船で、自由貿易品で正真正銘の貿易を行ったのである。1871年に日清修好条規と中日通商章程が締結されるまで、この期間の日中貿易を、日本側は「長崎唐風貿易」、中国側は「中日長崎貿易」と呼び、日本は鎖国令を出したが、中国商船による長崎港での貿易は歓迎していた。

清朝が1684年に貿易禁止を解除する以前は、中国の商船が長崎まで行って貿易をしていたのは貿易禁止に違反する密貿易であり、非常にリスクが高く、発展しにくいものであった。

海禁が撤廃されると、すぐに空前の盛況となり、長崎へ1684年には24隻しか来なかった中国船が、1685年には85隻、1686年には102隻、1687年には115隻、1688年には193隻と、わずか5年で8倍以上に増加した。当時はベトナムの船も唐の船を装って長崎で交易していた。

盛況の理由は二つあった。一つは、日本が鎖国をしていたため、日本船は海外に出られず、中国船とオランダ船だけが長崎に来て貿易ができたので、長崎に出荷される中国製品の価格が急上昇した。

当時の清朝官僚の靳輔の奏文では「内地の絹織物など全ての貨物は、日本などに積んで、多くの者が3、4倍の利益を得て、少ない者でも1、2倍の利益を得ている」と述べた

「18世紀初頭、広州で銀1.6両の砂糖1担の価格が、長崎では銀4.5両、2.8倍の利益となり、広州で水銀1担銀40両が、長崎では銀115両、2.88倍の利益、南京の生糸1担が広州では銀125両であったが、長崎では銀230両、利益は1.84倍となった。

二つ目の理由は、当時の中国国内には銅銭を鑄造する原料となる銅が不足しており、清廷は雲南省の銅鉱開発を解禁する一方で、東南沿海一帯の商人が日本に銅を買いに行くことを奨励した。日本から買った銅の6割は政府が公定価格で買い取り、残りの4割は市場価格で売ることができたので、その収益はかなりのものであった。

そのため、長崎での貿易は、往復でお金を稼ぐことができ、多くの商人を惹きつけた。「東倭考」によると、「大抵中国本土の価格が1だった場合、日本の価格は5で貿易ができる、そして戻ってくる時にも貨物でも商売ができるため、一挙両得であり、したがって、銅商人の富は南中（現在の雲南と貴州）で得た」と述べている。

長崎に貿易に来たオランダ船はオランダ東インド会社から派遣されたもので、公的貿易であり、年に1、2回しか来なかった。中国船とは比較にならない少なさである。オランダ船が長崎に持ち込んだ主な商品も、実際は中国・広東で購入した中国製品であったので、経済・貿易の面では、オランダ船は日本にとって取るに足らない存在であった。しかし、日本がオランダ船を考慮したのは、オランダ船と長崎のオランダ商館が、日本にとって西洋文明を吸収し、西洋の動きを知る重要なチャンネルになったからであった。

長崎貿易のあまりの急成長に、徳川幕府は規制をかけざるを得なくなった。まず、入港する船の数を制限、貿易額も制限された。そのために持ち込まれた品物を持ち帰ることが非常に難しくなり、密輸が行われるようになったのである。

1689年、日本は「唐人館」を設置し、唐人はすべて唐人館に滞在することを義務

づけ、密入国を禁止した。1697年に日本側は物々交換商法を実施し、1698年に貿易管理役所「長崎会所」を設立して貿易官営化を実施した。

1715年、正徳新例が導入され、輸入量、船数、積荷量を制限して貿易規模を大幅に縮小し、貿易管理を強化するために信札（長崎港への入港許可）の制度が創設された。

日本の統制が強化され、銅などの輸出原料の不足が深刻化すると、長崎の唐船貿易は次第に衰退し、長崎に来る唐船は1765年にはわずか13隻に激減し、銅も13000担にとどまった。

中国側の事情も変わり、1717年から禁止されていた東南アジアとの貿易が、1727年に福建省で最初に解禁され、1729年には全面的に解禁されたのである。

清朝は民間に東南アジアからの米の輸入を奨励したため、東南アジアとの民間貿易が急速に発展した。

清朝は外国船の往来は1757年に寧波港を閉鎖し、広東省に1港のみ開港した。これは対外貿易政策の大きな転換であり、清朝の鎖国時代の始まりでもあった。1840年にはアヘン戦争が起こり、1851年から1864年にかけて、海外では欧米列強による中国侵略と弾圧、国内では太平天国運動が続き、清朝の衰退は加速された。日中双方の情勢の変化が、長崎唐船貿易の衰退に拍車をかけた。

筆者は2000年3月に福建師範大学歴史学部を訪れ、歴史学部の先生に長崎の日中貿易の歴史について調べてもらったが、先生からは、歴史的な関連資料はほとんどなく、豪商や地元の有力者の系図を調査すれば、ある程度わかるかもしれないが、長崎の中日貿易は民間貿易であり、長い期間は密輸貿易であり、公的記録がなく、民間でも発覚されることを恐れて、公式記録はほとんどないと言われた。筆者は、この指摘はもっともだと感じている。

有楽町 慕情（11）

津田孚人（86歳）

「石坂泰三社長の時代」

昭和9年（1934年）11月、石坂泰三は専務取締役役に就任、そして昭和13年11月、社長に就任した。52歳のときだった。石坂は就任にあたって、次のように方針を語っている。（第一生命100周年史）

「矢野恒太前社長は日本の生命保険界の第一人者として、医学は勿論、法律、経済、数理に至るまで広範な専門知識を備え、それらを十二分に生かして経営に采配を振るってきたが、今後は会社の規模が大きくなったことを踏まえ、組織力で社業を運営していく必要がある」

新社長は、翌16日、本社組織の改革とそれに伴う人事異動を発表、即日実施した。従来の支配人、アクチュアリー、医長、の三権分立主義を一層強化するために支配人・稲宮又吉に社業を統括させた。稲宮は石坂が第一生命に入社後、矢野恒太が、石坂の補佐役として逡信省貯金局係長職にあったのを連れてきて入社させていた。石坂が外遊中のことであり、石坂が承知していたのかどうか定かでない。

石坂は積極的だった。組織については部制度を布いて、アクチュアリーには保険

数理の分野では国際的に著名であった保険院数理課長の亀田豊治郎理学博士を、医長には東京帝国大学医学部助教授の茂在照博士を迎えた。財務部も新設され初代の財務課長に三菱銀行を2年まえに退行し入社していた矢野一郎（次の社長）が就いた。

創業以来、事務処理能力の向上に積極的で、明治時代にミリオネア計算機を、大正時代にパワーズ式（現ユニシス）統計機械を他社に先駆け導入、機械化の面では常に業界をリードしていたが、石坂は、専務時代の昭和12年（1937年）、日本経済連盟の経済使節団としてアメリカに出張、その折にIBM社を訪問し、ホレリス式統計機械を実地に見学し、採用すべきだと判断した。帰国後の12月、会社はホレリス式採用を決め、担当職員をアメリカIBM社の「カスタマー・トレーニング・センター」に派遣し、約1年間にわたって機械操作の実地訓練を受けさせた。

注目されるのは、石坂が社長に就任するのが昭和13年11月だが、就任前の、同年4月に、内勤職員（事務職員）の55歳定年制を決め、9月から実施していること。組織の拡充、機械による事務処理能力の向上を図る一方で、人員の膨張を抑制するという経営の理にかなった施策をみると、石坂新社長は、矢野恒太の思った通りで、期待に十二分に応えていたと思われる。

石坂時社長代になって、昭和14年7月から、保険加入時の診査時、他社に率先して、東芝携帯用レントゲン器を試験的に使用、翌年からの肥田製携帯用小型レントゲン器とあわせ、全国支社に配布、高額契約の被保険者の診査に使用された。さらに、同年5月には、創業以来の物故職員544柱の慰霊祭を、石坂社長以下で執り行っていた。

社業は、軍需インフレの高進、国策による貯蓄奨励運動などもあって新契約の伸びは著しく、15年3月、支部を支社にあらためて満州を含む全国に52支社を置き、その下に支部、または事務所を配置して集体制を一段と拡充強化した。

また稲宮の発案だったが、昭和14年（1939年）9月、館内に私立日比谷女学校を開設した。石坂は校長に就任、主事には前東京女子高等師範学校教授の富士徳次郎を迎えた。日中戦争の拡大にともなって男子職員の採用が難しくなり、女子事務職員の採用が増えた。

女子事務員には、高等女学校卒業生のほかに年齢のさらに低い高等小学校の卒業生（14歳～15歳）も多数採用した。こうした小学校卒業の女子事務員は、入社後夜間の女学校に入学し、勤務を終えた後に通学するものがほとんどだった。この実情を見て、会社は福利厚生制度の一環として、さらには優秀な女子事務員を多く採用できると考え、会社内に学校を設置することにし、修業年限は3年、1年1学級で定員50名、授業は、毎日午後5時半から、3時間とした。

学科は、高等女学校の授業科目に順じ、特に職業人、家庭人としての品性の陶冶、知識・技芸の習得を心がけた。

日比谷女学校は、開校以来毎年のように入学希望者が定員を上回り、スペースのこともあって抽選で入学生を決めた。しかし、戦局の悪化から、昭和20年4月から国民学校初等科を除く授業は原則停止になり、やむなく当校も休止、戦後22年4月の学制改革で6・3制の義務教育が始まり、入学該当者がいなくなったので廃校となっている。

太平洋戦争が始まると政府の統制強化があらゆる面で行われた。昭和16年12月、保険行政は商工省から大蔵省に移管され、昭和17年4月、国家総動員法に

基づいて金融統制団体令が公布され、生命保険会社は、生命保険統制会にまとめられ、業務上の一切の統制が行われた。授業料のどの費用は会社負担、夕食を支給した。

まず、各社に国債保有率の引き上げが指示された。昭和14年から16年までは、増加資産の5分の2とされていたのが、昭和17年度には、5分の3に引き上げられ、19年度には、さらに前年度末の総運用資産の3割と、年度中の増加資産の4割5分の合計額が、各社の引き受けとなった。資産運用のほぼ半分は国債の保有となり、低金利は各社の経営を圧迫した。

その間、17年9月以降各社は四半期ごとに統制会あてに資金の流入と運用との計画書を提出することを命ぜられ、統制会はこれによって業界全体の総合資金計画を作成し、全国金融統制会に提出して、その指示、統制を受けることになった。

営業面では、戦争の広がりに連れて加入者が激増し、普通保険の戦争の扱い、傷病者への保険金の支払いなど、統制会が政府と対処した。

昭和20年8月15日の終戦ののち、生命保険統制会は大蔵省の全国金融統制会など金融関係6統制会に対して、9月30日までに解散すべし、という命令にしたがい、同日をもって解散した。

終戦時の昭和20年8月末において第一生命の保有契約高は113億4900万円、総資産は16億2600万円だった。在外資産は、4億4千万円、総資産の約4分の一、そのすべてを喪失した。

GHQは、昭和21年1月4日、軍国主義者の公職追放の指令を発し、さらに、昭和22年1月4日、公職追放の改正が公布され、財界、言論界、から地方公職関係にあったものまで広く対象となった。

第一生命では、昭和21年12月31日に、矢野恒太会長、石坂泰三社長、森村市左衛門、服部玄三などの取締役、今村繁三監査役が辞任していた。

役員が公職追放となったのは、生命保険業界では、明治、帝国（後の朝日）、日本、第一、千代田、の5社。株式会社組織であった、明治、帝国、日本の3社は、戦時中役員の職にあったものは無条件で全員退職となり、相互会社組織であった、第一、千代田は、個人審査の上該当する役員のみ、退職となった。

第一生命では、矢野恒太会長、石坂泰三社長の二人が、公職追放の対象となった。

このときの心境について、石坂は、その著くゆうきあることば：読売新聞社＞でつぎのように、語っている。

わたしが、第一生命を辞めたのは敗戦の翌昭和21年12月であった。思えば、29歳で矢野恒太さんの秘書となったわたしは、33歳で支配人、35歳で取締役、48歳で専務、そして52歳で社長となり、二代目の矢野一郎さんに社長を譲るまで、じつに33年の歳月が流れている。

こうして29歳から60歳までの前半生を第一生命にささげたが、その時分には、第一生命が契約高で業界2位にのし上がって、わたしはもう思い残すことはなかった。

第一生命を辞めて二年間、浪人暮らしをしていた。最初に東京芝浦電気入りの話をもってこられたのは、佐藤喜一郎さん（三井銀行相談役）と、津守豊さん（元東芝社長）のお二人だった。暑い盛りだったから昭和23年の7月ごろだった。そのころ私は晴耕雨読、悠々自適といきたいところだが、じつは食べることに追われて、毎日、

庭でジャガイモづくりに懸命だった。

講演会のご案内

●新三木会

第140回講演会：9月21日（木）13:00—15:00

会場：神田一ツ橋・如水会館2F

演題：『電気自動車（EV）の今後について』

講師 法木秀雄氏（一橋大学昭44経卒）

元北米日産自動車副社長、BMW・JAPAN 常務、

元クライスラー・ジャパン社長、元早稲田大学商学部教授

申込 <https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6>

（または新三木会へ mail）

会費：会場（受付払い）2千円

今後の予定 141回 10月19日（木）13:00—15:00

演題 習近平政権の正念場、経済の減速、失業率高騰

講師 柯 喬 東京財団政策研究所主席研究員

142回 11月16日（木）13:00—15:00

演題 学徒出陣80年

講師 保坂正康（歴史学者）

●奈良 興福寺佛教文化講座

日時 令和5年 9月30日（土）午後1時15分～午後3時35分

会場 新宿・（学）文化学園・文化服装学院 C071

講師 第一講「多聞院日記にみる酒造り」 興福寺執事長 辻 明俊

第二講「お釈迦様の教え」 興福寺貫首 森谷 英俊

受講料1000円、先着200名

事務局

天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX：03-3819-7651